

例会抄録

「池田文書」の薬について

遠藤 正治

池田支仲と謙斎の池田家二代は、お玉ヶ池種痘所の開設以来、西洋医学所から東京医学校、東京大学医学部、あるいは侍医局や陸軍々医部の要職に就き、いわば日本の医学界の中核にあって医療や医学教育に活躍した。従って、池田文書には医療や医学教育に関わる記事が少なくない。

とりわけ池田文書の書簡類には、天皇・皇族をはじめ華族、政・財界の主要な人物をふくむ患者に関する容体や処方伝える記事が多数見られる。これらは、支仲・謙斎および交流のあった医家たちの公私にわたる医療の実態を伝える貴重な史料と言えよう。

幕末から明治中期、十九世紀後半は欧米ではまさに近代医学の成立期であり、わが国では蘭方からドイツ流医学への転換期であった。この転換期に、日常の医療は如何になされていたのであろうか。池田文書のなかにこの時代の医療の実態や医学思想の転換の様相を読みとれないであらうか。

ここでは、支仲と謙斎宛ての書簡に記載される薬品の分析を糸口に、これらの疑問の解明を試みる。

一、薬品名の記された書簡の概況

『東大医学部初代総理池田謙斎 池田文書の研究』(上・下)に収載された書簡一・二・三・三通および未収載の書簡一・一〇・九通を調査した。薬品名を記した書簡は一七四通あり、うち、発信時期のほぼ推定できたものは九四通、年代不明のものは八〇通である。前者の年代分布は、安政五年頃から明治三十年頃までで、謙斎のドイツ留学期(明治三〜九年)の空白を経て明治十年代ピークがあり、謙斎が医局長を辞めた明治三十二年頃には零となっている。

発信者の内訳では、種痘所関係の医家と侍医局関係のものが七八通(四五%)であり、これらのポストに関連した病用が大きなウェイトを占めている。

二、書簡に記載された薬

支仲・謙斎宛て書簡一七四通に記載される薬品名は、延べ五〇〇品におよぶ。これを薬剤別に分類し、引用度数順に見ると、

キナ・キニーネ六六、アヘン類三〇、サルチル酸二二、ヨウ素剤一九、単シロップ一六、鉄剤一五、臭化カリウム一四、塩酸類一四、重炭酸ソーダー三、ヂギタリス一二、吐根一一、水銀剤一一、大黄一〇等々である。

キナ・キニーネ キナ類は、蘭方時代「百薬の首長」(旅篤児薬性論)といわれ、解熱のほか保固・強壯・収斂・防腐・鼓神・活脈の効力があるともされており、多様な処方が行われていた。

キニーネ類の処方を見ると、概ね体温三八〜四〇度の熱性疾患の解熱剤として用いられている。キナ生薬が解熱剤以外に汎用されていたのとは著しい対照をなす。熱性疾患の原因としては、間歇熱（マラリア）の記載はなく、胸膜炎・肺炎・腸チフス・感冒・リウマチ・肺気腫・膀胱炎などが挙げられている。呼吸器系の疾患のほか、チフス、急性リウマチなどに解熱剤として用いられたことを示している。

キナ・キニーネの服用は多くは嫌われていた。「兎角キニーネ丸服用後ハ嘔気増加、御迷惑」山川幸喜、「キニーネ服用ノ為メ大ニ食欲を損シ、且ツ頭重」石井信義、「規尼丸服用後三時間もへたて、粥を食し候処、又々嘔気催し食物を吐し申候」細川潤次郎、「久宮今朝丸葉キニーネ子差上候処、御吐乳」香川敬三、「昨朝多量之キニーネ服用候へとも、眩暈・頭痛を甚敷起し候而已」井上毅など、胃カタルによる嘔気・嘔吐のほか頭痛などの副作用の問題がつきまといていた事がわかる。

アヘン・モルヒネ アヘン剤はヨーロッパで、「人生必須ノ薬物」（扶氏薬剤学）とされ、その麻酔効果から鎮静・鎮痛・鎮咳・鎮痙・収斂・催眠剤などとしてひろく用いられてきた。池田文書では、引用例一三のうち一〇例は下痢症状に対するもので、おもにアヘン丁幾のかたちで用いられ、その収斂・催眠作用を期待したものと思われる。

モルヒネの引用例一一では、鎮咳作用を期待したと思われる例が五例あり、神経性胃痙攣・嘔気などに対する鎮痛・鎮

痙剤としての利用も五例見られる。

サルチル酸 蘭方時代にはサリックス・アルバの樹皮が水楊皮として解熱・防腐・収斂剤などとして用いられていたが、池田文書には水楊皮の利用についての引用は見えない。

サルチル酸の利用が明治十年代頃にはじまり、急速に広まっていた。

サルチル酸の利用一四例その内訳は、胸膜炎や感冒に対する解熱剤としてが六例、リウマチに対してが五例、神経性頭痛の鎮痛剤としてが一例である。

サルチル酸は今日内用されることはないが、サルチル酸・サルチル酸ナトリウムともに内用されていた。「最初サルチル酸ソーダを四十匹投シ候処、悪心之気味ニて服用致兼候間、サルチル酸を丸トシ相用」竹内正信。

サルチル酸類の解熱剤としての利用は、キニーネ類が効かない症状に対しても期待されていた（隈川宗悦書簡）。

サルチル酸類も一般に服用は嫌われていた。「解熱剤之眩暈之様子ニ有之、サルチーサンハ病人何分ニも嘔気強く服シ兼候」井上毅。

こうした事情からサルチル酸の誘導体アンチピリンの使用も始まっている。

三、旧薬の退潮

蘭方時代に重用された蘭方薬の多くが、あまり用いられなくなっている。カミレ五、桂皮四、サツサfras四、アロエ四、センナ二、サレーップ二、サフラン一、接骨木一、海

葱一、杜松一などである。漢方薬についても池田文書にはほとんど見えない。

四、訳名の系統

幾那・規尼涅・莫兒非涅・撒里矢尔酸など池田文書に登場する訳名の由来を宇田川家訳述書(『遠西医方名物考』『新訂増補和蘭藥鏡』『舎密開宗』など)、シーボルト『藥品応手録』、林洞海『窠篤兒藥性論』などと比較すると、宇田川家訳述書および『窠篤兒藥性論』の系統の訳名が顕著である一方、シーボルト用藥の訳名の影響は強くないことがわかる。

(平成十九年五月例会)

*** 紹介 ***

Akimitsu Naruyama 編

Dr. Ikaku Ochi Collection

本書は、東京のギャラリー経営者 Akimitsu Naruyama 氏が入手した、一九〇〇年前後日本の症例写真集である。本書に収録されているのは、桐箱に三六五枚一括保存されていた写真の内の約一四〇枚で、シャム双生児などの先天性障害や感染症によって身体の変形が極度に進行したものが多い。写真を挟んで巻頭と巻末には、Anna Von Senger 氏、Akimitsu Naruyama 氏、Sumio Ishida 氏による、資料の来歴や歴史的価値についての解説が、英語とドイツ語の二カ国語で書かれている。

それによると、写真のもともとの所蔵者は広島島の医師 Ochi Ikaku である。彼は一八七五年に“Uedonomura in Sankengun” (広島県山県郡上殿村) で生まれ、一八九五年に“medical faculty of the University of Kyoto in Okayama” (当時岡山にあった第三高等学校医学部。一八九三年に第三高等学校医学部から改組された) を卒業した() 内はいずれも鈴木注)。

三六五枚の写真の内、一五〇枚には裏面に通し番号と写真館名、病名が付されていたという。撮影者は一八六八年生まれの Ota Tsutomu、岡山にて写真館“Ota Rakusui-ken”を経営していた人物とされる。症例写真の内三件については、